

人が舞と唄がまはるまちで 無形民俗文化財

華やかなだんじり屋台の子供歌舞伎、田植え唄。その音や姿に触れると、今年もこの季節が巡ってきたことを感じさせてくれます。城下町文化や農村の営みを今に伝える無形民俗文化財の歩みをたどります。

吉田町 安芸高田市指定無形民俗文化財 吉田 子供歌舞伎だんじり屋台

清神社の例祭「市入祭」で披露される「子供歌舞伎だんじり屋台」。1674(延宝2)年に始まったとされ、300年以上の歴史を持つ伝統芸能です。だんじり屋台には舞台や花道が設けられ、本格的な歌舞伎の世界が繰り広げられます。吉田子供歌舞伎壇尻屋台保存会の会長・原田勇治さんは、「昔の吉田は城下町として栄え、お茶屋さんもあり、芸事が盛んな地域でした。屋台が出せない時には、芸子さんが三味線を弾きながら歩いていました」と話します。

吉田子供歌舞伎壇尻屋台保存会
会長 原田 勇治さん



1955年ごろから岡山県奈義町の農村歌舞伎の先生を招き、現在の子供歌舞伎の形へと受け継がれていきました。演目は本歌舞伎の演目を基に、子どもでも演じられるよう15~20分ほどに再構成。衣装の着付けや化粧、演技指導などは専門家や地域住民が支えています。「だんじり屋台は小さいので、中学生がちょうどいい。昔は地域の子どもがたくさんいて、自然と参加していました」と原田さん。かつては5台の屋台が出ていましたが、現在は「千歳山」と「八雲山」の2台。今年は「八雲山」のみで行われました。少子化や若い世代の減少により、後継者不足も大きな課題となっています。「伝統行事は続けていかないとけません。保存会を中心に、地域みんなで守っていききたい」と原田さん。長い歴史の中で受け継がれてきた子供歌舞伎だんじり屋台は、今も地域の誇りとして市入祭を彩っています。

子供歌舞伎を披露した吉田中学校の生徒

(左から)
頓兵衛役・中村 心咲さん
六蔵役・福田 桃明さん
お舟役・重森 由羽さん

練習は2週間、毎日頑張りました。先生が動きやセリフを一つ一つ丁寧に教えてくれて、少しずつ上達を実感できました。本番では上演を重ねるごとにうまくなったと感じ、練習も本番も楽しかったです。伝統芸能を受け継ぐことができて光栄でした。これからも続けてほしいです。



市入祭

清神社の例祭として毎年5月5日に行われる伝統行事。御祭神が氏子地区へお渡りするみこしの御幸に合わせ、だんじり屋台が城下町を巡行します。屋台では吉田町内の中学生3人が歌舞伎を演じ、地域ににぎわいと華やぎを届けています。



高宮町 原田

国指定重要無形民俗文化財

安芸のはやし田(原田はやし田)

中国山地に残る数少ない大田植えの民俗芸能「原田はやし田」。450年以上前、深い泥に苦しみながら田植えをしていた人々が、助け合いながら作業を進める「もやい田植え」の唄として歌い継ぎ、太陽と土と水の神「さんばいさん」を迎える神事と共に守られてきました。戦時中に一度途絶えましたが、地域の若者たちが古老から唄や作法を学び復活。1957年には「原田田楽団」を結成し、受け継ぎできました。

1997年には「安芸のはやし田」として国の重要無形民俗文化財に指定。原田はやし田保存会の会長・中川雅彦さんは、「『さんばい迎え』『朝唄』『おなり』『日暮れ唄』『唄い止め』など、田植え唄は約2,400種もあり安芸・備後・石見・出雲

地方の唄が数多く残っています。国の重要無形民俗文化財指定に当たっては、特に原田節のゆるやかな節回しが評価されたようです。これが何とも独特のリズムで…難しいんですよ」と笑います。

現在は早乙女、胴はやし、それぞれ約20人ずつが参加。5月から練習を重ねて本番に臨みます。「神事を大切に、省略せず続けていることが大事な部分です。私も中学生の頃からずっと続けています。楽しみにして毎年参加してくれる人もいるので、これからも地域みんなで守り続けていきたい」と中川さん。変わりゆく時代の中でも、原田はやし田は地域に暮らす人々の心のよりどころとして受け継がれています。



原田はやし田保存会
会長 中川 雅彦さん



担い手不足も課題となる中、外国人技能実習生が参加するなど、新たなつながりも。



来原さんばい祭り

毎年開催される来原地域のお祭り。祭りの見どころの一つである国の重要無形民俗文化財「安芸のはやし田」の実演をはじめ、高宮中学校はやし田同好会による模擬田植えや、子ども神楽団、地元神楽団による神楽が披露されます。さらに、地域の活動団体によるステージ発表も行われ、世代を超えて多くの人々が集うにぎやかな祭りとなっています。